

< 2016年11月 >

古賀 順子

中道右派「プリメール」

フランス大統領選挙を来春に控え、11月20日(日)中道右派「プリメール」(大統領選挙予備選)第1回投票が実施されました。前大統領ニコラ・サルコジ(61歳)、前大臣フランソワ・フィヨン(62歳)、前大臣・現ボルドー市長アラン・ジュペ(71歳)、唯一の女性候補ナタリー・コシュコ・モリゼ(43歳)、ジャン=フランソワ・コペ(52歳)、ブリュノ・ル・メール(47歳)、ジャン=フレデリック・ポワッソン(53歳)の7候補で争われました。

立候補から投票までの運営は、全6章(14条)から成る「プリメール憲章(Charte de la Primaire)」に則して行われます。第1章「原則」において、2017年フランス大統領選挙で「共和党」が支持する候補者を投票によって選出する。候補者は、9月9日までに手続きを行うこと。「共和党」を支持する18歳以上のフランス人は誰でも投票することができ、一人2ユーロ(投票運営及び党運営費として)支払うなど、細かく定義されています。

9月22日から公式に選挙活動を開始した7名の候補者、2回のテレビ討論のインパクトが大きく影響し、大統領復帰に賭けてきたサルコジ(得票率20,6%)が予想に反して第3位、初回で落選。終盤で急上昇し、大差で首位を獲得したフィヨン(44,1%)。「中道右派プリメール」としては、400万人以上という過去最高の投票率で、一時はトップにいながら2位に落ちたのがジュッペ(28,6%)。過半数(50%)を上回る候補者がいなかったため、上位2候補が、27日(日)第2回決戦投票に進みます。11月24日(木)フィヨン対ジュペのテレビ討論が非常に重要な役割を果たすと思われます。大敗したサルコジは、開票後、政治引退とフィヨン支持を発表し、決戦投票ではフィヨン勝利が予想されています。

現職左派フランソワ・オランド大統領(62歳)の人気は最低(支持率10%)で、中道右派「プリメール」を制した候補が大統領に最も近いと言われ、早くもフィヨン大統領か、の声が出ています。

オランド大統領が再立候補するかは今のところ不確定で、来年1月に予定されている左派「プリメール」で最終立候補が争われますが、社会党は分裂し、2017年の大統領選に左派が勝つ見込みはないだろうとの意見が大半を占めています。

この一年の世界の動きを見ると、6月23日イギリスがEU離脱、11月8日ドナルド・トランプ(70歳)がアメリカ大統領に選出されるなど、自国の利益を最優先する方向に向かっています。来年春のフランス大統領選も、極右・国民戦線党マリンヌ・ル・ペン(48歳)が勢い付いており、ル・ペンと共和党(フィヨン、またはジュペ)の決戦になるだろうと予想されています。

フランス国籍を持たない私たち外国人に大統領選挙権はなく、行方を見守るよりありません。政権が交代する度に移民政策も変化し、労働ビザや滞在許可証発行など、外国人への影響は大きく、2017年から5年間の政策方針が気にかかります。

「変化は今」をスローガンに、2012年大統領に就任したオランドは、若者の雇用を増やし、失業率の減少を公約しましたが、達成できませんでした。任期中に起こったテロ事件(2015年1月7・8・9日シャルリー・エブド社襲撃、2015年11月13日パリ同時多発テロ、2016年7月14日)の脅威は、今なお続いています。5年間の任期決算書ともいべき著『彼は大統領(Lui Président)』(アルマン・コラン社、2016年10月)を出版したオランドは、「政治における公約」の意味を問うています。

左も右も結果は同じ、という不満はフランスにも言えることのように思えます。経済が回復し、人への信頼が戻る社会に繋がる大統領選になることを願います。